

イギリスへ渡った茶 (10)

富山八十八 (とみやま やそや)

イギリス東インド会社以後の中国茶貿易
 ジャーディン・マセソン商会 1933年にイギリス東インド会社の中国貿易独占が撤廃された後は私貿易商が中国茶貿易に参加してくる。その代表的なものがジャーディン・マセソン Jardine Matheson & Co.Ltd. 中国名は怡和洋行 (以下 JM 商会) であった。

同社はアヘン戦争前後に中国に多数進出したイギリス系商社のなかで資本金がもっとも多く活動範囲ももっとも広がった。同社はアヘン戦争の渦中に香港に拠点を構え自由貿易の尖兵として積極的に活動した。1842年の南京条約で上海が開港されるとすぐさま進出し、1858年に日本がアメリカに続いてイギリス、ロシア、フランスとも修好通商条約を結び横浜に外国人居留地を設けるといち早く進出してその社屋は「横浜一番館」とよばれた。

ジャーディンはスコットランド出身で、イギリス東インド会社船の船医からボンベイで貿易商人となった。マセソンもスコットランドの出身でカルカッタにある叔父の会社に勤めた後、広東にやってきてジャーディンと知り合った。二人はイギリス東インド会社の中国貿易独占撤廃に備えてパートナー・シップ (合名会社) をつくった。

マセソンがインド・アヘンの輸出ライセンスを持っていたことから中国へのアヘン輸出が大きな仕事となる。アヘン戦争後もインドアヘンを扱ったが、次第に中国茶と中国生糸の輸入が増えて行く。

1850年代に茶の買付に決定的役割を果たす茶鑑定人に、ロンドンで鑑定の修業を積んだ一族の一人が香港に来て茶買付の責任を負った。
前貸制度 JM社は有力な茶買付商たちと契約を結んだ。

東インド会社は茶の集貨を確実にするために行商に翌年分の契約代金の半分を前貸し、行商

は茶荘に前貸し、茶荘は山戸に前貸していた。この前貸制度は民間会社でも踏襲された。

JM商会の茶の販売は、当初は公行から委託されたものが多かったが、JM商会が自己勘定でロンドンへ直接送るものもあった。ロンドンでは契約した1商会に委託して販売した。

1840年にアヘン戦争が始まるとJM商会は事務所を香港沖の船に移し、中立国のアメリカ人を雇って広東に駐在させて取引を続けた。同商会の船はユニオンジャックではなく、領事職を引き受けていたデンマーク、スウェーデン、ロシアの国旗を掲げるなど巧妙に振る舞った。

JM商会の茶取引はアヘン戦争中も確実に増えていった。1837年の141,756ドルを100とする指数は、38年に161、39年に332、40年度は89に減るが41年には129に回復した。

第1次アヘン戦争後の1843年に上海が開港され、中国茶の輸出総量は7000万重量ポンド (31,710トン) を越えた。

40年代後半になるとJM商会は上海を新しい拠点とした。47年には茶買付商を福建省に派遣して茶を仕入れた。

JM社の茶の販売には①自社扱い、②中国商人委託、③英国商人委託の3種があった。

自社扱いは逐年増加してゆき、49年には84.8%になった。自社扱いはうま味も大きいがリスクも大きい。44～47年は毎年損失で特に45～46年の損失は329,536ドルに上り、各パートナーが負担した。

仕入れ地では広東のウエイトが高い。46年67.8%、49年81.6%と、アヘン戦争後に開港場が増えたものの、広東に築かれた古い商業ルートの強さを示している。

中国茶取引の全盛期 1850年代は中国茶貿易の全盛期といわれた。輸出総量は、

| | | | |
|-----|-----------|-----------|-------|
| 51年 | 99百万重量ポンド | 約44,847トン | 指数100 |
| 56年 | 130 | 58,890トン | 131 |

資料：石井摩耶子『近代中国とイギリス資本』

これは1854年に福建省北部の茶産地武夷地方に近い福州で茶貿易が開始されたからであった。ここはアヘンの密輸が盛んだが、合法的な茶貿易は事実上禁止されたままで、茶取引はもっぱら広東と上海で行われていた。ところが1856年に大平天国軍が茶産地を占領したり広東、上海への茶輸送ルートを閉鎖したりして茶の輸出が大幅に減少したので福建省当局が福州での茶取引を認めるようになったのだ。大平天国軍による影響は60年には元へ戻った。

JM商会の茶取引は50年代後半に入ると急激に増加した。

- (1) 福州支店の本格活動で新規仕入が57年から増加した。
- (2) 販売先はイギリス向けがほとんどであるが、56年よりアメリカ、オーストラリア向けが増えてきた。50年代の仕向地先

| | イギリス | アメリカ | オーストラリア |
|--------|-------|-------|---------|
| 50～56年 | 83.4% | 9.3% | 7.3% |
| 57～59年 | 72.1% | 16.0% | 11.9% |

- (3) 利益額はイギリス向けの変動が激しく茶取引の投機的性格を物語っている。
- (4) 第2次アヘン戦争後の1860年代では、
 - ① 62年に揚子江中流の漢口が開港され湖南、湖北の茶の輸出港が広東から漢口に移った。
 - ② 交通・通信手段の改善とともに中国商人と外国人商人との競争が激化した。
 - ③ 輸出量はさらに激増した。仕向地はイギリス、アメリカ、オーストラリアのほかにオランダが加わった。
 - ④ JM商会の60年代の茶取引は非常に厳しかった。62年末から在庫が増え続け、60年代前半に仕入れた茶はいつまでも売り捌けず68年末に「損失」処理とし、パートナーたちが損失を負担した。損益は赤字続きで69年になってようやく黒字に転じた。
 - ⑤ これは茶の現地買付競争が激しくなり、仕入れ価格が高騰したこと。

およびアメリカの南北戦争でアメリカからの綿実の輸入が途絶え、紡績工場が甚大な打撃を受けイギリス経済が悪化して茶消費が減退したことなどによる。

恐慌 1865年にアメリカの南北戦争が終わり、綿実ブームの破綻とともに66年にはイギリスを中心に世界経済恐慌が起こった。インドアヘン密輸以来JM商会の最大のライバルであったデント商会をはじめ、中国での有力なイギリス系商社が続々倒産した。

1869年のスエズ運河の開通による輸送時間の短縮が茶取引のあり方に決定的な変化をもたらした。これまでロンドン市場には茶は冬から春にかけて長時間に渡って到着していたものが、秋の数週間に集中するようになり、取引期間が縮まったために茶の販売競争が激化した。

中国茶貿易の衰退 JM商会の本国向け茶は、67年の290万ドルを最後に70年代を通じて200万ドルを割り、100万ドル前後に縮小した。

70年代初めには悪天候で減収したこともあったが特記すべきことは中国茶貿易が量的には増加したものの、金額的には1872年をピークに漸減して行ったことである。これはインド、セイロン、さらには日本の茶の進出によって、中国茶が価格を下げつつもイギリス、アメリカでシェアを失っていったことが原因である。

中国茶全体の茶輸出額は1867年の3,455万両テールから72年に4,489万両に増えた後は漸減してゆき、84年には2,906万両と最盛期の65%にまで大幅に減少した。

これは67年に1ピクルス当たり26.3両であった中国からの輸出価格がインド紅茶、日本緑茶の進出で連年低下してゆき84年には14.4両と半値近くまで低下したことが大きい。

参考資料：石井摩耶子『近代中国とイギリス資本-19世紀後半のジャーデン・マセソン商会を中心に』東京大学出版会、1998年。ほか。

日本緑茶の進出

日本緑茶の輸出を初めて手がけたのはトマス・ブレイク・グラバー Thomas Blake Glover である。グラバーは幕末動乱期に薩摩をはじめ西南雄藩や幕府に武器や艦船を売り、高島炭鉞の開発、薩摩藩と共同の小菅ドック建設などで知られる。その邸宅は長崎に現存する最古の木造洋風住宅として重要文化財になっている。

グラバーはスコットランド生まれ。18歳で上海に渡り、1859年に21歳で長崎に来て

ジャーデン・マセソン商会の長崎の代理店で書記となった。1865年に独立してグラバー商会を設立した。

長崎では開港後、大浦海岸を埋立て外国人居留地がつくられた。

日本の茶生産は江戸期に入って低落した。幕府が茶は米穀の生産を妨げ、農民を遊惰にすると茶樹の栽培を認めなかった。そのため宇治や近江、嬉野の一部を除いて茶園はなく、畑の畦や屋敷の生垣とした茶樹の葉を摘み取って飲むのが普通だった。

清国は大平天国の乱で生糸と茶の集貨が激減し、値上がりははなはだしく価格の安い日本の生糸が欧米商人の人気をよんだ。

日本茶輸出第1号 大浦慶は17歳で長崎で代々油屋総代を務めた旧家の跡取りとなるが家運は傾き、起死回生策として長崎会所の輸出商売に目をつけた。輸出商品は特定の指定商人に限られていた。慶は茶に目をつけた。

イギリス商人ウイリアム・オルトが茶の見本を持って慶の店を訪れ、茶を注文した。慶は佐賀県嬉野の茶を集め、オルトによって海外へ運ばれた。日本茶輸出の第1号である。

グラバーは茶の集貨を慶に依頼し、長崎居留地に日本最初の茶葉再製工場を建てて操業した。長崎の人は工場を「お茶場」とよんだ。

茶葉は生産農家で火入れ（乾燥）されているが総じて乾燥が不十分で、海上輸送中にカビが発生したり品質が劣化するのを防ぐためにここで再乾燥させる。

上海から輸入された大きな鉄鍋を炉にかけて茶葉を入れ、薪を燃やし、鉄鍋の茶葉が湯気を立てると2本股の攪拌棒で茶葉をかき混ぜ乾燥させる。作業するのは女性たち。工場は湯気と熱気で蒸し風呂のように暑い。襦袢と腰巻きだけの女性たちは汗びっしょりとなる。午前5時から午後4時または5時までの11～12時間もの苛酷な労働である。

再製された茶葉は内部を防湿包装した木箱に詰めて密封され船に積まれた。工場設立の資金と茶の買い取りはJM商会が援助した。

欧米と日本との貿易が始まると日本では生糸、茶、蚕卵紙の3品が輸出の御三家となった。これら御三家は1860年代後半には輸出総額の60%を占め、うち茶が20%を占めた。

ティークリッパー時代

「クリッパー」は3本マストの快速帆船のことでアメリカで生まれた。19世紀中頃、中国から茶を運ぶ快速帆船が「ティークリッパー」とよばれた。

イギリス東インド会社が中国貿易を独占していたときは、アジアからの輸送は大量に安全に運ぶことが主眼で、輸送に何日かかろうと競争相手がないのだから問題にならなかった。

東インド会社の中国貿易独占の撤廃に続いて1849年に「航海条例」が廃止された。航海条例は200年前の1651年にクロムウェルが優秀なオランダ海運に対抗してイギリスへの輸入品はイギリス船に限るとオランダ船を排除し、そのためにオランダと戦争を引き起こしたものだ。王政復古で王位についたチャールズ2世も航海条例を出し第2次英蘭戦争となった。だがこの条例の撤廃でイギリスへの貨物はどこの国の船でも運ぶことができるようになった。

航海条例が撤廃された1849年にニューヨークで建造された「オリエンタル」号が処女航海で香港へ向かい、帰りは81日で戻った。これはたいへんなレコードだった。

香港在住のイギリス商人が早速この船をチャーターしてロンドンへ茶を送ったところ97日目の1850年12月3日にロンドンに到着した。新鮮な茶は高値で売れた。チャーター料は1万ポンド、同船の建造費は14,000ポンドだったからえらく稼いだものだ。

これが刺激となって茶の輸送にはだんぜんヤンキー・クリッパーがチャーターされ、そのためイギリスの海運業も造船業も不況となった。だがイギリスでもヤンキー・クリッパーに対抗する快速船「アバジーン・クリッパー」の2隻が1850年と翌年にティー・クリッパーとなった。

1815年建造の会社船は1,417トンで積載量500～1,400トン。甲板は2層で砲を備え軍艦に転用できた。乗組員130人。船団を組み、途中風待ちし、危険水域では軍艦に護衛された。

これに対し1866年建造のティークリッパー「エアリエル」号は853トン、乗組員32人で中国＝ロンドンをノンストップで100日前後で帆走した。